

## カルジャ撮影の写真に基づくロッセーニの肖像

(『家族週報』パリ、1864年2月13日号)

(水谷彰良コレクションより)

### 『家族週報』1864年2月13日号のロッセーニの肖像

『家族週報 (*La Semaine des familles*)』は、ジャーナリスト/カトリックの歴史家/右派立憲主義者アルフレッド・ネットマン (Alfred [François] Nettement, 1805-69) により 1858年10月2日パリで創刊された週刊誌である。「絵入り世界誌 (*revue universelle illustrée*)」と副題され、1896年3月28日まで37年6カ月間継続した(ネットマンが主幹を務めたのは1869年11月20日号まで)。これはカトリックの保守的な価値観に基づく穏健な雑誌で、1号当たり16頁からなり、1年間に840頁を想定して頁番号を付している。婦人向けの連載小説を毎号4枚の挿絵と共に掲載し、ゴシップ記事、政治社会、芸術に関する話は除かれている。それゆえオペラや演劇に関する記事も無く、他の絵入り新聞と違って著名人の肖像も掲げないが、1864年2月13日号(第6年第20号)のみロッセーニの肖像を掲載し、約3頁を使ってフェリックス=アンリ (Félix-Henri おそらく筆名) による略伝も載せている。1頁のサイズは29×18.5 cm、ロッセーニの肖像部分は14.4×10.1 cm。

この肖像画はカルジャ撮影の写真(別稿「ロッセーニの写真名刺(カルジャ撮影、1861-62年頃)」参照)を直接の下絵としたらしく、左右反転している。興味深いのは肖像の左下に「Henri Rousseau」、右下に「Gusmand」の名が刻まれていることで、Henri Rousseau が後の天才画家アンリ・ルソー (Henri Rousseau, 1844-1910) その人かどうかは現時点で未確認である(アンリ・ルソーは1864年当時19歳で兵役についており、パリに出るのは1868年なので別人の可能性もあるが、同時代に同じ名前の画家は見当たらない。これに関してフランス美術史の専門家のご教示を賜りたい)。Gusmand は彫版家アドルフ・グスマン (Adolphe Gusman, 1821-1905) で間違いなく、ルソーとグスマンによるロッセーニの肖像は他にも作られている。

音楽と無縁な婦人向け週刊誌に突然ロッセーニの肖像画と略伝が掲載された経緯は不明であるが、パリの音楽界では1カ月後の3月14日に初演される《小ミサ・ソレムニス》が話題になっていた。とはいえ略伝にはこれに関する言及がなく、ロッセーニ72歳の誕生日目前とあって取り上げたものと思われる(うるう年の2月29日生まれで、1864年は18回目の誕生日とあって注目されていた)。



『家族週報』1864年2月13日号掲載のロッセーニの肖像(筆者所蔵)